



存在の自明性を問う

社会科教育講座 梶尾 悠史 准教授

学校教育と哲学

今、考え議論する活動が学校教育において重要視されています。この活動は広い意味で「哲学」と呼べます。しかし、本来の哲学は、思考の対象や方法を正確に限定したうえで厳密にその枠内で考える、特別な思考活動です。では、このような学問としての哲学は、学校教育とまったく無縁なのでしょうか。以下では、哲学とはどのような営みであるかを説明し、わたしの見解を述べたいと思います。

哲学とは

誰も、日常の当たり前の事柄が不意に謎めいて見えてきて、得も言われぬ驚きにとらわれることがあるでしょう。たとえば「存在するとは？」という問い。この問いは世界観の土台を根底から揺るがすだけに、計り知れない驚きを私たちにもたらしめます。こうした驚きとともに哲学は始まるのです。

日常を驚きの日で眺めるとき、私たちはすでに哲学を始めています。このように哲学は日常の延長



哲学・倫理学研究室のメンバー。卒論構想発表会に臨む。



梶尾悠史「フッサールの志向性理論」晃洋書房、2014年。



演習の様子。テキストを精読する。

線上で営まれます。にもかかわらず、哲学の議論は多くの人に机上の空論という印象を与えるかもしれません。というのも自然科学と違い、哲学の仮説は実験・観察によって検証されるものではないからです。このこと背景には、それぞれの学問の研究対象の違いがあります。自然科学は「世界が存在する」という前提に立って自然界を観察し、その中に、たとえば物質の法則を見出そうと努めます。他方、哲学は上記の前提そのものを問い直し、存在する物質等ではなく、むしろ存在一般の意味・構造・様態を主題的に研究します。つまり「存在する」とはそもそも何を意味するのかということ、「世界が存在する」という理解の背後に遡って問うわけです。そのため哲学は自然科学の前提を無批判に利用できず、自ずと両者の議論の次元は異なってくるのです。

世界と私が出会うとき

わたし(筆者)が専門とする現象学は、既存の前提を利用しないことを哲学固有の態度として徹底し、方法論的に練り上げます。現象学では「世界が存在する」という素朴な判断がいったん停止されます。現象学的エポケーと呼ばれるこの操作によって、直接体験こそが最も確実な思考の原理であることが明らかになります。つまり、たとえ世界の存在に確信が持てないとしても、「私が何かを見ている」ということや「私に何かが見えている」とい

うことなど、これら一人称体験は疑い得ない確実なことだと分かるのです。

わたしの研究テーマは、自らの体験に基づいて世界の存在が確信されるに至る過程を、一人称の視点から精緻に記述するというものです。構成分析と呼ばれるこの手法の意義は、様々な種類の対象について「存在する」ということの意味をより深く、正確に理解できるようになることにあります。私が見るリング、私が考える数5、私が意志する善は、どれもある意味で存在しています。しかし、体験に基づいて構成される過程や、存在者として通用するための条件は、対象ごとに異なります。そうした過程や条件を突き止めることにより、存在者の背後に潜む存在の起源が解明されます。わたしは現象学の祖フッサールから以上の研究方法を学び、世界と私の原初の出会いを求めて意識というフィールドを日々探索しています。

研究室の取り組み

哲学・倫理学研究室では、所属するゼミ生一人ひとりが、各人の関心に応じて幅広いテーマについて研究を行っています。研究において、まず自身の驚きを他者と共有できる「問い」の形に一般化・言語化することが求められます。こうして自ら設定した問題をめぐって各々が「自分で考える」ことが、本研究室の主な取り組みとなります。

とはいえ、自分が立てた問題が必ずしも真にオリジナルな研究主題であるとは限りません。むしろ、類似の問いが先人によって議論されていることのほうが圧倒的に多いでしょう。だとすれば、素手で難問に取り組むより先人の知恵を借りながら考えた方が、より深い真理に到達できるに違いありません。そのようなわけで、普段の演習授業は、主に古典的著作の講読を中心に進められることとなります。その際、過去の哲学者の思考が、時間・空間を超えて、テキストに対峙する一人ひとりに届けられ、自身の思考と交流します。このことに、いま・ここを共にするわたしたち哲学徒は、たえず驚きを覚えます。この驚きに導かれて、今日もわたしたちは「考える



🔍 クローズアップ+

とは？」と問いながら考え続けます。

ここまで見てきたように、さまざまな「当たり前」に驚く子どもの感性から哲学は生まれます。哲学は既成の常識や先入観にとらわれない自由な眼差しを大切にするのです。ところで、こうした自由が保障されて初めて、子どもは困難な諸課題を自分の体験と結びつけ、解決に向けて生きた思考を動かせるのではないのでしょうか。だとすると、今、本物の哲学が学校教育において求められています。皆さんはどう考えますか？



授業の小道具。身近な事象から哲学へ誘う。

プロフィール



社会科教育講座

かじ お ゆ う し
梶尾 悠史 准教授

東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)
2015年に本学着任

ゼミ生からの研究室紹介

梶尾研究室には、現在、9名の学生(3回生3名、4回生5名、大学院2回生1名)が在籍しています。

今年度の前期は、アリストテレスの「ニコマコス倫理学」、パークリーの「人知原理論」を読み、演習を行いました。偉大な哲学者たちの考えを理解することは容易ではありませんが、梶尾先生の温かなご指導のもと、粘り強く対話する姿勢を大切にしながら、活発な議論を行うことができています。

また、哲学研究では、善や幸福について、改めて深く考えます。それらのことに「正解」はありません。「正解」を求めるのではなく、互いの考えを理解しようとする「対話の姿勢」は、今後教員となり、子どもたちと関わるときに

も大切になると思われます。

梶尾研究室は、哲学者の考えに触れながら、他者との対話を行うことで、より自分の考えを深められる、魅力ある研究室です。

教育学部
学校教育教員養成課程
教科教育専攻
社会科教育専修 4回生
山形県立山形西高等学校出身

まつだ みあみ
松田 実晏さん

